進化する科学技術と社会の関係

原山優子会員

何故、科学技術イノベーション政策が必要かというと、科学技術イノベーションは経済成長の源の考え方があったが、その目的も多様化しつつある。第5期基本計画では、社会的課題を解決する概念としてSociety5.0を打ち出した。継承する第6期はSociety5.0の実現に踏み込んでいる。

昨今の科学技術イノベーションの特徴は、スピード感がこれまでとは全く違う次元になってきていることである。新たな技術、イノベーションを実装するに当たっては、制度の枠を超えた発想が必要になってくる。

ヒトゲノム編集技術やAIは、予期せぬ悪意のある使い方やプライバシーの問題もある。今、世界で社会的な受容性やルール作りが議論されている。問われるのは、予期せぬことに対する準備と責任ある科学技術イノベーションを目指すことである。OECDが目指しているのは包摂的な成長で、強くサステーナビリティを謳い、最終的には、人々の幸福と持続可能な開発である。

AIに関しては、国連においてAI搭載兵器の議論もされている。SNSやディープフェイクが活用されることによって、バイアスのかかった情報が広がってしまう問題もある。AIと如何に賢く付き合っていくかであるが、人間力をしっかり持つ必要があって、そこを疎かにしてはいけない。我々は人権や民主主義が当たり前だと刷り込まれているが、必ずしもそうではなくて、技術も人権、民主主義などを担保する方向に賢く使うことが大事になる。

COVID-19は、社会と技術の関係性をもう一度見直す機会になった。ウイルスとヒトの関係は長い歴史がある。COVID-19はグローバルに一気に広がってしまったというこれまでに無い体験をしたわけであるが、データと情報共有がワクチン開発などに非常に大きな役割を担った。留意すべきことは、何のために、誰がデータを活用するのか、予期せぬ活用もあり得るわけで、マネジメントをどうするかが問われる。また、ウイルスに対する知識が体系化されておらず、ファクトやエビデンスが蓄積されない中で、政策決定者からイエスかノーか問われても適切な答えができない、サイエンスを本当に信じていいのかという一般の声もある。

このような状況の中で社会、科学技術イノベーションを推進するためには、様々な価値観を一般市民も含めて共有する必要がある。社会的な倫理観、多様性の許容、あるいは共感を作っていく、グローバルに進めていくというアプローチが科学技術イノベーションを推進すると同時に必要になってきていると思っている。